

論文審査の結果の要旨

氏名 中田 喜万

本論文は、儒学の思想潮流において統治秩序の要とされる制度の一つ、「学校」に着目して、徳川時代の日本で、この「学校」の構想がいかにか論じられてきたのか、その思想的展開と、現実に武家の学問所が普及してゆく歴史過程とのかかわりを、綿密に実証し、総合的に叙述した作品である。もともとは儒学と適合しない点の多い、徳川日本の武家支配秩序において、統治者たる武士たちが、しだいに儒学（朱子学）を熱心に受容するようになり、やがては「学校」を中心とした政治秩序（「学校の政」）の樹立までをも提起するまでに至る。徳川時代の全体にわたるこの過程が、論文全体の本筋をなし、さらに末尾では明治維新後の思想動向へのつながりを展望している。

「序説」と「終章」を含めれば全五章分で構成されている本論文の内容は、おおむね以下のとおりである。

序説『「学校の政」の理念～中国宋代の例から』において筆者は、論文全体の問題設定を示すとともに、もともと儒学の古典において、「学校」がいかにか位置づけられていたかを述べ、徳川時代の知識人にとって前提となる、中国宋代（そして朝鮮王朝）における「学校の政」をめぐる論争を通観して、徳川時代の議論を分析する際の座標軸を示している。儒学の古典において、学校には人材養成だけでなく、民衆教化や地域統合も含めた幅広い機能が期待され、秩序形成の中心に位置づけられている。宋代の士大夫社会でうまれた朱子学（程朱学）もまた、当時に横行した科挙向けの学問（「俗学」）を批判し、「正学」の理念を復興して「学校の政」を現実化しようとするものであった。当然その実現は困難であり、やがて朱子学そのものも科挙の体制にとりこまれてしまう。だがその「学校」観が、徳川時代の日本で、独自のありようを受容され、展開することになる。

第一章「武士と学問」は、徳川時代前期（十七世紀）における、武士のあり方と、学問論・学校論の萌芽的な展開とを探る。前代の戦国時代とは対照的な、平和な徳川の治世のもとで支配階層をなした武士たちは、新たな時代における「武士らしさ」を追求し、演じようと努めた。一面ではもちろん、中世以来の戦闘者としての武士のあり方を模倣し、それを阻むものとして学問を嫌忌する風潮が強かった。だが家訓類には学問のすすめも散見される。為政者として家来や領民の統治に注意し、そのための学問（軍学・兵学）を身につけることもまた、武士どうしの社交の手段としての利用も含め、新たに「武士らしさ」の内容をなすようになったのである。これに応じ、兵書や史論など、武家の必要に応える学問が普及しはじめ、そのための漢籍輸入にともなって、儒学の概念も入りこむことになった。

この過程で、為政者による「学校」設立の構想を、林家をはじめ様々な学者が提案することになる。中国・朝鮮とは異なって科挙がないため、その多くは現実離れした「学校の政」の主張を型どおりにくりかえすのみであったが、山鹿素行のように武士の「職分」との適合の試みも現れる。その中で幸運にも、大名家のもとで学問所を実現させることができたのが熊澤蕃山（1619～1691）である。だがその主張もまた、大名家の実状に適した

学校案へと譲歩をみせ、武士のたしなみの中で儒学がはたす役割を、狭く限っていた。学問所の実現はひとえに大名個人の好みに依存しており、理論面でも、「武士らしさ」と学問とをいかに接合するかが、課題として残されたのである。

第二章「学問振興につれて」は、十八世紀への転換点、元禄・享保期における社会・文化の大きな変容にともなって、儒学の書物の普及が大きく進んだようすをまず展望する。この時期には、出板業（本屋仲間）が成立をみて書物の供給は安定し、本屋（貸本屋）の営業を通じて、読書する人々の範囲が広がった。この条件のもとで、都市生活者たる武士の教養として、学問をとりこもうとする教説が流布し、文武二道の融合が進んでゆく。

しかし、このことが「学校」の実際の設立と普及とに、直接に結びついたわけではない。たとえば「学校の政」を一般論として論じた貝原益軒も、現実の施策としてそれを主張することはなかった。またこの時代、徳川綱吉などの好学ゆえに、儒者の地位が公認され、聖堂や学問所の設立も企てられたものの、制度として定着せずに終わる。そもそも、朱子学に忠実な立場をとる学者たち（室鳩巢など）は、試験のための学問をきびしく戒めたのであり、それでは武士を学生として集めることが難しい。

この時期、荻生徂徠（1666～1728）とその学派の著作が、書物の流通や漢詩文趣味の社交を介して、広い流行をみるに至った。しかしそれは、漢詩文を作る能力に傾斜した受容のされ方であり、その斬新な経書解釈も、適度な難解さも、出版市場での需要に応えるものであった。もともと徂徠の思想は、儒学における規範としての「先王の道」の目的が、現実の「安民」、統治活動にあることを強調しながらも、その「道」を知るにはまず古文辞（中国古代の言葉）を学ばなくてはならないとして、詩文の習熟への没頭を奨める。そして、各人の個性にあった自発的な実践を通じ、「識らず知らず」のうちに「道」を身につけるべきだと唱え、「義理」（正しい道理）の講釈などは有害無益だとして斥ける。むろん徂徠学にも、相応の道德論はあり、学校を重要なものとしてはいるが、詩文に習熟させ、悠長かつ奔放に遊ばせておくという、その学問論・人材養成論からは、とうてい、武家の学問所に関する具体案を生み出せないのである。

第三章「学問所設立と『正学』」で筆者は、十八世紀後半に至って、各地の大家で学問所が設立されるようになる経緯を分析する。この時代には、全国に商品経済化が波及したこと、また行政の複雑化を背景として、一般武士の奢侈や、日常生活の弛緩をひきしめることが、深刻な課題として意識される。学問所はそのために武士に道德や規律を教えこむ機関として、現実に設けられるようになった。この動向に学者の側でも呼応して、儒者の地位の向上や、学問所による人材養成を提唱する運動を始める。その中で注目すべきなのは、朱子学に基盤をおく細井平洲（1728～1801）の議論である。平洲は、各人の個性を多様なままに伸ばすことを提唱した徂徠学とは対照的に、学ぶ者を一定の期待される武士像へと訓育するような学問所を提唱した。武家学問所は、総じてこのような構想に基づいて実現したがゆえに、たとえば徂徠学派の儒者が用いられることがあっても、その学問はおのずと、朱子学との折衷に傾くことになる。

地方の動向は、さらに中央の改革をも呼び起こす。柴野栗山は、徳川政権に仕える旗本を遊惰に陥らせない方策として、賞罰を与え学問に励ませることを提唱した。そこで想定される学問は、実質上、武士が身分に応じて「家業」を遂行するための心がまえのようなものになる。さらに寛政の改革における、いわゆる「異学の禁」の運動もまた、標準的で

無難な朱子学を、公儀の学問所に採用した試みにすぎなかった。そこでは、「正学」とされた朱子学がなぜすぐれているのか、積極的な理由づけは行なわれず、朱子学本来の「俗学」批判の含意からは大きく離れていた。そこで目ざされたのは、試験による登用（学問吟味）とその後の賞罰を導入して、武士たちの学習欲を誘い、教説の規格を統一して学問所の運用を容易にすることであり、同じ「正学」の呼称を用いながら、その意味内容が大きくねじれていた。また、制度のすみやかな実現のために、学問所の内外で流派を使い分ける二面的な態度を認め、学問所附儒者の中からも、陽明学を兼ねた佐藤一斎や、蘭学に関心を抱いた古賀侗庵などが出た。このようにして、昌平坂学問所の制度が整備されると、そこで育った学者が大家に採用され、一面では学風の全国的画一化が進むことにもなる。

第四章「学問所から『学校の政』の国家構想へ」は、ひとたび制度として定着した学問所が、その設立の意図を超えて、広く中級武士にとっての出世の階梯になってゆき、やがて徳川末期には、「学校の政」の観念に基づいた政治体制の構想が登場するに至る過程を描きだしている。

まず、武士が学問することが常識となり、やがては開国の実務を担うことになるような人材集団を準備する。広瀬淡窓のように、学制の整備によって武士の虚飾や身分序列の弊害が除かれると論ずる者も現われた。昌平校の書生寮には、諸大家から拔擢された若者が集い、同様に各地の学問所においても、武士たちが各家中の垣根を越えて交流することになる。また、学問所で積奠、養老礼などの儀礼を催したことが、社会一般に対して儒学の存在感を増していった。

やがて洋学が「実学」として脚光を浴び始めると、儒者たちも注目し、徳川末期には、西洋諸国の政治制度に「学校の政」の実現を見るようになる。彼らは世界地理書を通じて、誤解も含みながら、西洋では学校に集会して政策を議論していると読みとった。この認識に基づいて、大家や徳川政権全体に関する改革案も論じられる。いわゆる後期水戸学の主張は、独自の「学校の政」を構想するものであったし、佐久間象山は、公儀に対し学校への洋学の導入を建言した。極端な例では、政府機関としての「教化台」を統治の根幹にすえる、佐藤信淵の構想も登場する。この動向の中、横井小楠（1809～1869）は、朱子学の理念に基づいた「実学」の立場から、同時代の学問所の「正学」を批判し、政府も学校も「実学」に拠ることで「学政一致」を実現すべきだと唱えた。こうした「実学」論は、朱子学本来の「正学」「俗学」をめぐる問題状況が、徳川末期に至ってようやく日本で登場したことを示している。だがそれは同時に、武士らしさ、そして儒学そのものをも脱皮する転換点ともなった。

終章『『実学』と『学問の自由』』は、徳川時代の「学校の政」、学問と政治との関係をめぐる議論が、明治維新ののちにたどった軌跡を展望する。明治新政府の下、学校の制度は改まり、学問の内容も入れかわったものの、学問と政治との関係については、それまでの「学政一致」観が支配していた。この点を批判して、学者の「私立」、学問の独立を主張したのが福澤諭吉である。しかし明治政府は、「国家の須要に応ずる學術技芸」を政府主導で育成する姿勢を保持し、かつての学問所における使い分けの態度を、西洋近代型の制度に転用する。近代日本の「大学」（この名称じたい、儒学の学校論に由来する）は、これに基づいて洋学の「実学」と儒学の「実学」とを妥協させた形で、発足することになったのである。

以上が、本論文の要旨である。

本論文の長所としては、次の諸点を挙げることができる。

第一に、儒学における「学校の政」の観念を軸として、徳川時代における、秩序にかかわる構想の思想史的な展開を、明瞭かつ説得的に叙述している。論考の範囲は、時代の全体に及び、主要な儒学思想家の言説をほぼ網羅して検討する。「学校」論という一つの視角から徳川時代の「政治思想史」の全体像を描いた試みとして、画期的な達成であり、今後の研究動向に大きな影響を与えることであろう。

第二に、従来の研究が提示してきた徳川思想史の全体像に対して、正面から批判をおこない、独自の展望を切り開いた。本来武士のあり方とは適合しないはずの儒学（朱子学）が、徳川時代後期になって武士社会に定着していったのはどうしてか、一世を風靡した徂徠学がなぜ急速に衰退したのか、後期に普及する「折衷学」とはいかなる営みか、といった、従来大きな疑問とされてきた諸点は、本論文によって、ひとそろいの一貫した解答を与えられたのである。徳川末期に提起されるさまざまな秩序構想について、単に西洋諸国からの外圧に対する反応ではなく、それ以前から継続してきた「学校の政」をめぐる議論との内在的な関連を明らかにした意義も大きい。

第三に、徳川日本の儒学思想家の著作と先行研究とを、綿密に読解するだけでなく、法令・日記などさまざまな史料を広く用い、教育史・出版史など他分野の最新の研究動向にも言及して、高度な実証性と説得力に満ちた議論を展開している。また、中国思想史にいったん沈潜し、儒学の古典や宋明期における「学校」論を引照基準にした上で、徳川時代の議論を通観する叙述方法も、周到である。筆者の研究者としての力量の高さを、十分に示すものと言える。

ただし、本論文にも短所がないわけではない。

第一に、全体の問題設定を、徳川時代の武士社会と「学校」構想との関係に絞った結果、「中世」と「近世」との断絶を、読者に過度に印象づけてしまう傾きがある。中世の「武家」における「文士」の存在や、戦国大名の「家中」における規律化との関係にも論じ及んでいけば、徳川時代の思想の特性が、もっと明確になったであろう。

第二に、徳川時代における蘭学・洋学から、明治初期の思想に至る系譜を、叙述に本格的にくみこんでいけば、特に末尾の福澤諭吉に関する議論などは、論文全体の中に、よりしっかりと据えられたと思われる。

第三に、叙述が細部の実証に流れ、全体との関連を見通しにくくしている部分が、時として見られる。

しかし、以上の短所も、本論文の意義と価値とを大きく損なうものではない。これは、膨大な史料の緻密な読解を通じて、徳川時代の政治思想史の全体を通観した、すぐれた学問成果であり、筆者が自立した研究者としての高度な能力をもっていることを証明している。また、政治思想研究としても、日本思想史研究としても、学界の発展への貢献がきわめて大きい。よって、本論文は、博士（法学）の学位を授与するにふさわしい、しかも特に優秀なものと認める。